

2021年5月30日三位一体主日・聖霊降臨後第1主日説教

出エジプト記3章1節—6節

ローマの信徒への手紙8章12節—17節

ヨハネによる福音書3章1節—16節

牧師館北側に面した通路の、非常に淡い青紫色あじさいが、きれいに咲いています。あじさいは一足先に梅雨入り宣言しているようです。

さて、先週の聖霊降臨日・ペンテコステの礼拝は、動画の中継配信をいたしました。前日から準備、リハーサルとたくさんのご尽力をいただき実行できました。コロナ禍が一日も早く終わることを望みますが、未来に向けて、新しい礼拝のあり方を、これからも皆様と作り上げていきたいと思えます。

教会歴では、本日は、三位一体主日であり聖霊降臨後第一主日でもあります。その表記の通り、近年は、三位一体よりも聖霊降臨後という表現を強調する傾向があります。しかし、教会にとって三位一体は今も大切な教えです。先週もし少し触れましたが、本日もそのことについて聖書箇所を通して学びたいと思えます。

この三位一体という教えは、そのもの自体を論理的に説明しようとするとなかなか難解です。またそのように考えない方が、教会の教えがわかりやすくなるのではないかと、という問いがいつも生じます。また、ユダヤ教やイスラム教と対話が進まないのは、三位一体の教えも理由の一つと言われることもあります。しかし、教会が、イエス様を通して示された出来事全体を、三位一体の教えを通して理解することに変わりはありません。

ただし、最初の教会が『聖書』としていた旧約とその続編の部分にも、現在の『聖書』にある新約の部分にも、三位一体という言葉や、それを直接示す箇所はありません〔父と子と聖霊という言葉の並びはあります（マタイ28:19）〕。しかし、それでも、三位一体的に考える理由は、『聖書』全体（旧・続・新）を通して示される主なる神様の愛が、そのように促しているからです。それは、その愛が、人間の理性と常識を超えているからであり、また単に概念として超えているだけではなく、主なる神様が、人間と全人格をもって対応し、そのような対応の仕方をもって愛を示される方だからです。そして、その愛に人間が同じように全人格をもって応えようとする、三位一体の教えを通して理解せざるを得ないのです。そのことを本日の日課を通して見てみましょう。

本日の「旧約聖書」日課は、出エジプト記の有名な、燃える柴の物語です。この物語は、全体の流れの中では、モーセの召命の物語の冒頭に位置しています。しかし、モーセは、決して品行方正な人物ではなく、人間として欠けた部分を持っている人です。召命前、同胞と共に奴隷としてエジプトに滞在していたとき、同胞を虐げていたエジプト人を殺害して砂に埋める事件を起こしています。そして、そのことを同胞から告げられると、エジプト当局に捕まることを恐れて、ミディヤンの地（現在のアラビア半島）に逃れました。その地の祭司エトロの娘ティポラと結婚し

て、二人の子ども（ゲルショムとエリエゼル）をもうけて、羊飼いとて、平然と暮らしていました。今日の表現では殺人と海外逃亡の罪を犯していた人です。

そのようなモーセが、「しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た」（出エ3：1）というところから、召命の物語が始まります。そこで柴が燃えているのをたまたま見るのです。モーセの召命の出来事は、モーセの側から見れば偶然なのです。しかし、主なる神様にとって、モーセとの出会いは偶然ではありません。本日の聖書日課を超えますが、「主は言われた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った』」（出エ3：7）とあるからです。つまり、モーセのことと、その同胞のすべてのことを理解した上で、モーセに一对一の出会いという形で、人格的に対面したのです。それは主なる神様が、人間の思いを超えて、主導権をもって、具体的に出会ってくださったということです。さらに、主なる神様がモーセに出会われた出来事は、モーセ個人の事柄に留まらず、エジプトからのイスラエルの民の救出という、社会的・歴史的な事柄につながりました。単に出会いという意味を超えているのです。それゆえ出エジプトの出来事は、今日でも主なる神様が、苦しんでいる人々を苦しみから解放して下さる物語として語り伝えられています。3000年を超える昔に、モーセという一個人に向き合われた主なる神様の出来事が、時空を超えて今も、そして、おそらくこれからも大きな意味を持つのです。

さて、その父なる神様と一体であるイエス様が、ニコデモと出会われた物語が、本日の福音書です。ニコデモは、ファリサイ派であり、議員であったと説明されています。本日のお話の中では、「イスラエルの教師」とも表現されています。ニコデモは、イスラエルの宗教的・社会的な意味で、指導者的立場にいた人のようです。このファリサイ派の人々は、一般的にはイエス様に批判的な存在として描かれることが多いです。しかし、このお話では、ファリサイ派であってもニコデモは、イエス様を主なる神様から来た方だと肯定的に考えていたようです。

ニコデモがそのように考える根拠は、「神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです」（ヨハネ3：2）。人間のだれが見ても不思議に思う奇跡など、様々なしるしをイエス様が行ったから、どう考えてもこの方は、主なる神様が遣わした方であろう、と考えたということです。きわめて理性的な判断です。

イエス様は、そのニコデモが何も質問する前に、唐突に「(答えて言われた) はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：3）と話しかけます。このように唐突に話が飛んだりするのは「ヨハネによる福音書」の特徴です。ニコデモの方でも、「初めてお会いするのですが」とか、「まだ何も質問していませんが」ということもなく、「年をとった者が、どうして生まれることができますしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができますでしょうか」（ヨハネ3：4）と、平然と会話を続けています。そのような物語の流れは、ニコデモの心の中には、いくつもの疑問があり、その中の一つに「神の国を見ること」があったと前提しています。そして、イエス様は、出会う前からわか

っていたことを暗示しています。それゆえ、会話の流れは不自然なのですが、お話としては、自然につながっているのです。

ここで用いられているギリシア語の「新しく」という言葉には、「もう一度」や「上から」、あるいは「初めから」という意味もあります。そして、それらは、物質的な変化を示す意味と、観念的な変化を示す意味とがあります。ニコデモは、物質的な変化として受け止め、もう一度生まれるという言葉の意味を理解できませんでした。

しかし、ニコデモのこの答えは正論です。理性的かつ常識的です。それに対してイエス様は、「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」(ヨハネ 3: 5-6) と語ります。イエス様のこの言葉は、ニコデモ問いに対する直接的な答えになっていません。しかし、ニコデモは、その点に注目するのではなく、イエス様の言葉を真正面から受け止め、再び理性的かつ常識的に判断しようとして、結果、「どうして、そんなことがありえましょうか」(ヨハネ 3: 9) と語ります。イエス様の言葉は、ニコデモの理解を超えていたからです。イエス様はそのようなニコデモに対して、「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか」(ヨハネ 3: 10) と語るのです。そして、「はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない」(ヨハネ 10: 11) と教えを続けます。イエス様とニコデモの二人しかいないのに、「わたしたち」と「あなたがた」と複数形になっているのは、この二人の会話の背景に、教会とユダヤ人たちの対立があり、またイエス様の言葉には、今、イエス様を信じて教会でこのお話を読んでいる・聞いている人が含まれているからです。

最終的に、イエス様に叱られたようなニコデモですが、彼はイエス様の語る言葉の意味が分からなかったのではありません。真意が分からなかったのです。イエス様の言葉には、二重の意味があり、ニコデモはその一つの方しか理解しなかったのです。二重の意味、ひとつは、「言葉」そのものの意味であり、人間の理性と常識の範囲内の意味です。もうひとつは、「言葉」をしるしとして示される意味です。そしてこちらの意味は、イエス様への信仰を通して理解されます。このことが、「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」という言葉にも現れています。そこから「肉」的な意味と、「霊」的な意味と言い換えることができます。また「わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう」(ヨハネ 3: 12) という表現にもつながります。ニコデモは、イエス様を神様からの人として理解しましたが、その言葉も行いも、人間の分かる範囲の「肉」的な意味でとらえようとしたので、「霊」的な意味を理解できなかったのです。

本日の福音書は、3章16節までとなっています。この節は、イエス様とニコデモとのお話には直接関係ないようにも思えますが、まとめの言葉として大切です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。もしニコデモがこのことを信じ

たならば、イエス様の語った言葉を、理解できたからです。イエス様を信じたとき、ニコデモは、霊を通して新しく生まれ変わっており、霊を通して考える人間となったからです。

イエス様の言葉には、二重の意味があると申しましたが、モーセのお話には、イエス様は登場しません。しかし、そこでも同様のことを見出すことができると思います。主なる神様は、「言葉」を通して、モーセに状況を説明し、モーセの質問にも答えます。しかし、モーセを動かしたのは、状況を説明した言葉ではなく、主なる神様がモーセを会おう前から知っており、モーセをそのような状況へと導き、召命の出来事を引き起こした、出来事を伴った「霊」的な意味でした（霊という言葉はありませんが）。モーセは、今起きていることが、今だけの意味ではないと「霊」的に悟ったからこそ、出エジプトの指導者としての召命を受け入れたのでした。ニコデモは、そのような悟りには至らなかったのです。

ヨハネ福音書は、「初めに言があった」と有名な言葉で始まりますが、「言」という「言葉」と異なる漢字で訳されているとおり、それが意味する内容は、父なる神様と一体である聖霊が、出来事を引き起こすという意味での「言」です。単なる話し言葉や知識ではありません。そして、「ヨハネによる福音書」は、その「言」が、すべて、天地創造の初めからおられる子なるイエス様に集中すると語ります。さらに子なるイエス様の十字架と復活に集中すると語るのです。そして、そうであるがゆえに、イエス様の出来事とは、父なる神様が子なるイエス様を通して聖霊が働くことであり、何が救いの本質であるかを示すと同時に、どのようにその救いに至るかを示す、道であり、命であり、真理そのものなのです。そのことがもたらす結果は、「**独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである**」という本日の福音書個所の最後に示されているとおりです。また本日の使徒書で、パウロが「**神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです**」と語っていることも同じです（ロマ8：14）。

冒頭で、『聖書』には、三位一体を直接示す個所はないと申しましたが、「ヨハネによる福音書」は、間接的であっても、それら三つが一体であることを示していると思います。「ヨハネによる福音書」的に言えば、「三つ」をそのまま「三つ」として理解したら、イエス様の言葉が、「言」としてわからなくなります。なぜなら、イエス様を信じて理解するとき、「三つ」は「ひとつ」となるからです。なんとなく、だまされているような、ごまかされているような感じでもあります。しかし、「三つ」が「一つ」として働くので、主なる神様の愛が、何が希望の本質であるかをわたしたちに示すのであり、わたしたちにとってその希望が、今もこれからも有効な事柄としてあり続けるのです。それは、何を理解したかを超えて、信じるかどうかの出来事です。様々な思いがあり、不安があり、また喜びもあるかもしれない。しかし、最後は、イエス様を信じるだけでよい。三位一体とは、わたしたちのことをすべてご存じであり、愛し、用いてくださる、愛そのものである主なる神様の姿を示す表現です。その愛を信じ、これからも励まされて歩みたいと思います。わたしたちの教会は、その尊い教えを名前にいただいた教会として、よりいっそうその愛に満たされながら、愛を示す教会でありたいと思います。